『地下出版のメディア史』展
――珍書屋から辿る軟派出版の世界

2022年11月30日［水］―12月14日［水］

〔会場〕**東京古書会館 2階情報コーナー**

〔休館日〕日曜・祝日　〔開館時間〕10:00 ～ 18:00　※土曜 17:00 まで
〔入場料〕無料
〔主催〕慶應義塾大学出版会　〔共催〕東京都古書籍商業協同組合

【著者略歴】
大尾侑子（おおび・ゆうこ）
専門は歴史社会学、メディア史。東京経済大学准教授。東京大学大学院学際情報学府博士後期課程満期退学、博士（社会情報学）。桃山学院大学社会学部准教授を経て、2022 年 4 月より現職。著書や論文に、「「白ポスト」はいかに“使われた”か？――1960-70 年代の悪書追放運動におけるモノの位相」『マス・コミュニケーション研究』100 号、143-162。「デジタル・ファンダム研究の射程――非物質的労働と時間感覚にみる「フルタイム・ファンダム」」（『ポストメディア・セオリーズ：メディア研究の新展開』ミネルヴァ書房、2021 年）ほか。

A5 判上製／ 496 頁　ISBN978-4-7664-2803-2 C3036
定価 4,950 円（本体 4,500 円）

本展示は、大尾侑子『地下出版のメディア史――エロ・グロ、珍書屋、教養主義』（慶應義塾大学出版会、2022年）の刊行を記念して、著者の家蔵史料のなかから、戦前昭和の「珍書屋」が頒布した軟派出版関連史料（書籍、雑誌、内容見本、チラシ類）、とりわけ梅原北明（1901–1946）とその周辺人脈にかかわる媒体を公開する試みです。

1920年代、日本社会では書物の大量生産が可能になり、従来は一部のインテリのものであった読書行為が大衆にも広く普及していきました。そんななか、書店に流通する公刊本が満たすことのできない特殊な欲求を満たしたのが、会員限定で頒布された媒体でした。なかでも検閲により発禁の対象となった「エロ（性・風俗）」や「グロ（猟奇・犯罪）」といった内容を扱う媒体の執筆、編集、印刷、製本、広告までを一手に担い、公刊流通のルートとは異なる独自の流通網を作り上げたのが「珍書屋」です。

現在でも「エロ・グロ」といった内容を扱う雑誌や書物は「低俗」な「低級文化」と見なされることが珍しくありません。しかし、それらの歴史を遡ると、まったく異なる一面、すなわち単なる「猥本」とは切り捨てられない近代日本を“裏道”から支えた知的水脈が広がっていました。本展示では、「エロ・グロ・ナンセンス」という言葉が都市文化を席巻した時代の前史としての「軟派出版」の世界と、そこで活躍した書き手や出版人の営みを、稀覯資料の数々から振り返ります。

エ・エル・ウイリアムス著、梅原北明訳
『露西亜大革命史』朝香屋書店、1925年

マルグリット・ド・ナヴァル著、梅原北明訳
『エプタメロン』国際文献刊行会、上巻1926年、下巻1927年（装幀 村山知義、1000部限定頒布）

『グロテスク』座談会、左下が梅原北明
（『グロテスク』1929年5月号収録）

【関連する人物紹介】

梅原北明（うめはら・ほくめい、1901–1946）。

本名、貞康。文筆家、編集者、翻訳家、新聞記者。烏山朝太郎、烏山朝夢、張門慶、耽奇館主人などの変名を持つ。富山県出身。大正14（1925）年、翻訳『全訳デカメロン』が話題となる。同年『露西亜大革命史』を刊行、プロレタリア作家との繋がりを強め、大正15（1926）年、雑誌『文芸市場』（1926～1927）を創刊。その後、『変態十二史』（1925～）の刊行を皮切りに、会員制雑誌『変態・資料』（1926～1928）などを頒布。その後、書店でも販売された『グロテスク』（1928～1931）などを手掛け、戦時下には我妻大陸のペンネームで少年誌等に小説を寄稿。浅草の演劇人とも交流が深かった。

【アクセス】

〒101-0052　東京都千代田区神田小川町3-22　東京古書会館

○JR中央線・総武線御茶ノ水駅「お茶の水橋口」より 徒歩5分

○東京メトロ千代田線新御茶ノ水駅「B3番出口」より 徒歩5分

○東京メトロ半蔵門線 神保町駅「A5番出口」徒歩5分

○都営地下鉄新宿線・三田線神保町駅「A5番出口」より徒歩5分

※会場には駐車場がございません。地下鉄・JRをご利用ください。

〔休館日〕日曜・祝日

〔開館時間〕10:00～18:00　※土曜17:00まで

※ご入場の際は、マスクの着用と入口での消毒をお願いいたします。

最新情報は、慶應義塾大学出版会 noteにて
https://note.com/keioup/n/n69402fbbfd22

〔お問合せ〕E-mail:　chikashuppan@keio-up.co.jp